

1914 年秋田仙北地震を詠んだ川越守固の短歌*

北海道大学 名誉教授 鏡味 洋史

秋田大学 地方創生センター 水田 敏彦

1. はじめに

大規模な地震災害の体験は日記や文学作品として残されることが多い。例えば、1923 年関東地震については多くの文学者が地震に関する文章を残しており、児玉¹⁾は成蹊大学図書館に所蔵の図書より関東地震に関する作品を抽出し、個人の全集、震災関係の選書、震災直後の雑誌等から約 800 件の作品をリストアップしている。また、これらの体験談から地震災害の実態を探ろうとする試みは広くなされている。たとえば、大本²⁾は関東地震と近代文学のかかわりを芥川龍之介と正宗白鳥を中心として論じている。筆者の一人、鏡味³⁾は同じく関東地震について寺田虎彦と永井荷風の日記から地震後の様子を時系列で整理している。本論で取扱う 1914 年秋田仙北地震については筆者らは当時の地震被害報告書、行政史料、新聞記事などを通じて文献調査を進めている^{例えば 4~6)}。

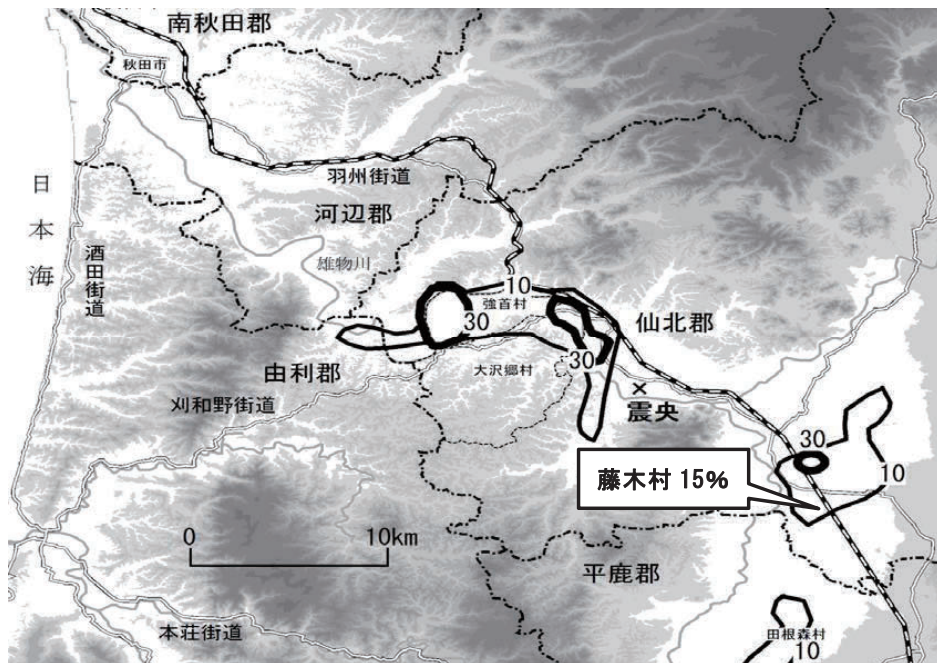


図1 1914年秋田仙北地震の住家全壊率被害と仙北郡藤木町

*Morikata Kawagoe's collection of Japanese poem composing evacuation lives in refuge after the 1914 Akita Senboku earthquake by Hiroshi Kagami and Toshihiko Mizuta

これらの文献調査を進める中で、未だこの地震に関連した文学作品には遭遇していなかった。最近、筆者らが1939年男鹿地震の文献調査を国会図書館近代デジタルコレクションを利用して文献検索を進める過程で、1917年刊行の川越守固著「かへらぬ日」⁷⁾という短歌集を探し当てた。キーワード「地震」「男鹿」での検索に引かったのは目次の中に「男鹿の海」と「地震」という章があったからであり偶然であった。「地震」と題する章では1914年仙北地震を詠んだ一連の短歌が掲載されていたが、一方の「男鹿の海」は地震に全く関係はなかった。

小論では、この歌集に掲載されている短歌を紹介する。歌集の著者は当時の仙北郡藤木村の出身で藤木村に於ける避難の様子を詠んでいる。

2. 1914年仙北地震の概要と仙北郡藤木村

本地震の諸元は日本被害地震総覧⁸⁾によれば、発震時1914年3月15日4時58分、東経140.4°、北緯39.4°、M=7.1である。筆者らが既報⁴⁾で求めた被害分布および被害から求めた震度分布を図1に示す。全壊以上の被害が生じた地域は、北は南秋田郡広山田村、南は平鹿郡植田村、西は由利郡北打越村まで震央から30km程度離れた地域にまで広がっている。震度7の激震地域は震央に近い雄物川沿いの強首村の強首、木原田、大沢郷村北野目、神宮寺町宇留井谷地および横手盆地上の大曲町東側となっておりその周辺も震度6+となっている。

仙北郡藤木村は仙北郡の南端に位置し、1954年5月に大曲市に合併し、さらに2005年3月周辺の町村を合併し大仙市となっている。藤木村の被害は表1に示すように、死者1、負傷2、全潰64で前報⁴⁾では震度6+と判断している。

表1 1914年秋田仙北地震の仙北郡藤木村の被害（文献⁹⁾による）

町村名	死傷		住家（戸数）				非住家（棟）			
	死	傷	全潰	半壊	焼失	破損	全潰	半壊	焼失	破損
藤木村	1	2	64	34		42	5	3		13
計	94	324	640	575	3	4232	285	305	3	2325

3. 川越守固「かへらぬ日」

秋田県における短歌の歴史をまとめた「秋田県短歌史」¹⁰⁾があり、目次は、第一編：総説、第二編：歌誌、第三編：短歌会、第四編：歌人、の4部構成で末尾に編者：石田玲水のあとがきがある。第四編：歌人、では15人の歌人が紹介されており、川越守固については渡部賢朗が記述している¹¹⁾。これを参照し、作者の川越守固の略歴を以下に示す。

1890年12月2日：仙北郡藤木村で豪農の長男として生まれる：

14,15歳のころから短歌を作る

大曲の農学校【注】に入学

1911年（17歳）中央歌壇「詩歌」入り前田夕暮等と作歌に励む

1915年（21歳）「デッサン」を中村長二、帯屋久太郎と創刊

1917年（23歳）「かへらぬ日」を東京抒情詩社から出版

1924年（30歳）「溪木集」を水甕社同人尾上柴舟外9名と出版
没年については記載がないが、早世したことが記されている。

「かへらぬ日」⁷⁾は1917年に抒情社から刊行された歌集で、序に続く、上編、下編の2部の総139頁よりなる。序は歌壇「詩歌」を主宰する前田夕暮が著している。『君の生まれた仙北郡藤木村といふところは鳥海山に稍近くす青く彩られてゐる。君の歌をとほして想像すると随分冬は雪が深く殆ど数十日も太陽を仰ぐことの出来ぬ日さへつづくらしい。・・・君が如何に永い冬の間、青い空と、太陽光とにあこがれてこの幾年をくりかへし過ごしてきたか・・・』と藤木村の冬の状況を述べ、著者の川越が冬ことに雪を題材にしていたことを述べている。

歌集の上編では14、下編では8つの表題が付けられそれぞれ数編の短歌が収められている。下編に「地震」という表題があり13首の歌が載せられている。

【注】大曲農学校：1893年秋田中学に併設の農業専攻科を母体とし1901年秋田県立農業学校に改称、1904年大曲市に移転、1926年大曲農業学校に改称。現在、秋田県立大曲農業高等学校。

4. 「かへらぬ日」の短歌

「かへらぬ日」⁷⁾に掲載されている短歌を次に掲げる。

最初に「大正三年三月激震あり、畑中の避難所にありてをのきつつよめる歌」との書き出しで、歌が掲げられている。読みやすくするため、番号を付し、5・7・5・7・7の区切りにスペースを入れて再録した。

- | | | | | | |
|---|-------|---------|-------|---------|---------|
| ① | 地震震ると | おのおの | 走りたり | おほあめつちは | いまだ暗しも |
| ② | 地震震ると | 人ら集ひて | 大篝 | 吹雪の中に | かこみけるかな |
| ③ | みちばたの | 吹雪の中に | より集ひ | かなしき人ら | 火を焚きにけり |
| ④ | 青埴ふく | 地罅かなしく | 春のそら | 日のゐる下に | わが佇てるかな |
| ⑤ | 地底より | 青埴ふきいて | うらうらに | 日に焼ゆるこそ | うたてかりけれ |
| ⑥ | 倒れふす | 家の下びに | 馬をりて | をりをり泣くは | かなしきものは |
| ⑦ | 日はくらく | 空にかげりて | 大海の | 鳴のひびきを | いま地にきく |
| ⑧ | たえまなく | 地震震り来り | み空より | 夜はやうやくに | 近づけるかな |
| ⑨ | たえまなく | 地震震りくれば | 明くるなく | 暮れゆく夜かも | 近づきにけり |
| ⑩ | たえまなく | 地震震りくれば | 生き心地 | なしと歎かず | かなしき母よ |
| ⑪ | たえまなく | 地震震りくれば | 畑中に | てんとをはりて | 幾夜かもねむ |
| ⑫ | 地震震ると | 畑のてんとに | かよりあひ | 妻子がねむる | 旅人のごと |
| ⑬ | 地震震ると | 畑のてんとに | あかす夜の | 小夜のくだちに | なくは何鳥 |

5. 短歌から読取る地震の状況

最初の3首①～③は、畑の中に設けた避難所で火を焚き吹雪の中でで過ごしている様子を詠んでいる。次の④⑤では「青埴」ふく、としており液状化が発生したことを表している。⑥は倒れた家と馬の様子を詠んでいる。⑦～⑩は続く余震の様子を、⑪～⑬は旗に設けた避難用のテントでの寝泊まりの様子を詠んでいる。

前述のように、これまでの文献調査で藤木村では被害統計から震度6+と推定した。村の様子を現す文書は見つかっていないが、今回の一連の短歌から、畑中に避難のテントを設け寝泊まりしていた様子がうかがえる。余震が続く中しばらくテント生活が続けられた様子がうかがえる。また液状化が発生していたことも詠まれている。

6. まとめ

小論では、文献調査を進める中でたまたま見つけた短歌集の中に1914年仙北地震を題材にした短歌があるのを見出した。掲載されている十数首から吹雪の中での避難生活の様子を探った。被災地の与えた影響は大きく他にも当時の状況を伝える文学作品が残されているかもしれない。文献調査の範囲を広げ機会を見て進めていきたい。

文献

- 1) 児玉千尋：関東地震と文豪－成蹊大学図書館の展示から－，成蹊論文、47、11-41，2014.
- 2) 大本泉：関東地震と近代文学－芥川龍之介と正宗白鳥を中心として，仙台白百合女子大紀要，17，11-18，2013.
- 3) 鏡味洋史：個人の側面から見た大地震の影響－荷風・寅彦日記と関東地震，自然災害科学総合シンポジウム講演論文集，16，591-592，1979.
- 4) 水田敏彦・鏡味洋史：1914.3.15秋田仙北（強首）地震の被害分布に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，29，325-328，2008.
- 5) 水田敏彦・鏡味洋史：1914.3.15秋田仙北（強首）地震の秋田県による震災対応に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，39，785-788，2012.
- 6) 水田敏彦・鏡味洋史：1914.3.15秋田仙北（強首）地震の写真資料に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，46，1147-1150，2014.
- 7) 川越守固：かへらぬ日，抒情誌社，140pp，1917.
- 8) 宇佐美龍夫，石井寿，今村隆正，武村雅之，松浦律子：日本被害地震総覧，東京大学出版会，pp.265-268，2013.
- 9) 今村明恒：大正3年秋田県仙北郡大地震調査報告，震災予防調査会報告，82，1-30，1915.
- 10) 石田玲水：秋田県短歌史，寒流社，166pp，1960.
- 11) 渡部賢朗：川越守固，秋田県短歌史，137-138，1960.